

# オノマトペに見る漢語の影響

## —和語系オノマトペと漢語系オノマトペの関わり—

中 里 理 子\*

(平成17年10月31日受付；平成17年11月30日受理)

### 要 旨

日本語のオノマトペ研究は、従来和語のオノマトペ（和語系オノマトペ）を中心に考えられてきた。漢語由来のオノマトペ（漢語系オノマトペ）は、その存在を認められながらも、擬音語・擬態語辞典でもほとんど取り上げられてこなかった。しかし、漢語系オノマトペの中でも、疊語形式のものは語によって古くから和語系オノマトペと受け取られているものもあり、和語系オノマトペと深い関わりを持っていると考えられる。「しんと」と「しんしんと」や「ほんやり」と「茫然」の例に見るように、漢語系オノマトペは語形面でも意味の面でも和語系オノマトペに大きな影響を与えている。漢語系オノマトペに着目し、その関連で和語系オノマトペを見ることは、オノマトペの生成や音象徴性、動詞や使用文脈との結びつきの強さ、意味の変遷など、オノマトペを幅広く捉えていく際の大きな手がかりになると思われる。

### KEY WORDS

和語系オノマトペ Onomatopoeia of Japanese origin

漢語系オノマトペ Onomatopoeia of Chinese origin

音象徴 Sound Symbolism 語形 Word Form 意味 Meaning

### はじめに

日本語には和語・漢語・外来語と三種類の語種があるが、中でも和語と漢語は古くから密接に関連してきた。オノマトペ（擬音語・擬態語）においても和語と漢語の関連は深く、いわゆるオノマトペとして扱っている和語のオノマトペ（以下、和語系オノマトペと呼ぶ）は漢語から大きな影響を受けている。日本語のオノマトペ研究では漢語由来のオノマトペ（以下、漢語系オノマトペと呼ぶ）は研究対象外とされることが多いのだが、本稿では個々のオノマトペを例に取りながら、和語系オノマトペにおける漢語の影響を見ることの必要について考えたい。

### 1. 和語系オノマトペと漢語系オノマトペ

まず、日本語のオノマトペに和語系のものと漢語系のものがあることを確認しておく。和語系のもとは日本語として言葉の音と意味の間につながり、すなわち音象徴があると考えられるもので、一般に言う擬音語・擬態語である。擬音語は、例えば「鈴がリンリンと鳴る」「コン

---

\* 言語系教育講座

コンとノックする」の「リンリン」「コンコン」など音声の描写をするものであり、擬態語は、例えば「煙がモクモクとあがる」「力がグングン伸びる」の「モクモク」「グングン」など音声を発しない事柄・状態の描写をするものである。

それに対して漢語系オノマトベは、漢語すなわち中国から輸入した語であり、漢字表記されることが多い。例えば擬音語としては、「汽車がゴーゴー（轟々）と音を立てる」「木を切る音がチョーチョー（丁々）と響く」の「轟々」「丁々」などがあり、擬態語としては、「ユウユウ（悠々と歩く）」「煙がモウモウ（朦々）とあがる」「コンコン（滾々とわき出る泉）」「コツコツ（兀々と努力する）」「リン（凜）とした態度」などがある。漢語系オノマトベはもともと漢語なので、そこに「オノマトベらしさ」すなわち、日本語として発音される言語音と意味の間につながりを感じるものはそれほど多くはない。ここにあげたものは、中でもオノマトベらしいものを選んだが、どういうものにオノマトベらしさを感じるかは、第3節で語形の面から見ていく。

## 2. 辞書に見る漢語系オノマトベ

ここではまず、漢語系オノマトベが日本語のオノマトベに含まれないことが多いことを、各種の擬音語擬態語辞典の掲載から確認していく。

現行の擬音語・擬態語辞典の主なものは次の5種類である。

- ① 天沼寧『擬音語・擬態語辞典』（東京堂出版 1974年）
- ② 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』（角川書店 1978年）
- ③ 阿刀田稔子・星野和子編『擬音語・擬態語使い方辞典』（創拓社 1993年）
- ④ 山口仲美編『暮らしのことば 擬音語擬態語辞典』（講談社 2003年）
- ⑤ 飛田良文・浅田秀子編『現代擬音語擬態語用法辞典』（東京堂出版 2002年）

これらの辞典の中で漢語系オノマトベがどのように扱われているのかを見てみた。①～④では、辞書項目に漢語系のオノマトベはほとんど取り上げられていないが、⑤では、辞書項目や「参考」欄に取り上げられているものがいくつもある。

漢語系のものの中で日本語のオノマトベと受け取られやすいものについて、各辞書に掲載されているかどうかを見てみた。

<①～⑤の辞書に項目として挙げてあるもの・挙げていないもの>

	①	②	③	④	⑤
ごうごう（轟々・轟々）	×	○	○	○* <sup>1</sup>	○
ふつふつ（沸々）	×	×	×	×	○
ほうほう（茫々）	×	×	×	○* <sup>2</sup>	○
もうもう（濛々・朦々）	×	○	×	×	○
ゆうゆう（悠々）	×	×	×	×	×
りん（凜）	×	×	×	×	×
しんしん（森々・深々）	×	×	×	△* <sup>3</sup>	○

\*1 「ごうごう」の参考に「似た意味の漢語で、とどろきわたる音を表す「轟々」という語があり、戦前は車輪の音などを表すのに用いられた。」とある。

\*2 「ほうほう」の参考に語義の②（草や髪・ひげなどが手入れされずに伸びている様子）

は語源として漢語「茫茫」あるいは「蓬蓬」が想定されている、とある。

- \* 3 「しんしん」の項はないが、「しん」の参考語に語義の②（寒さや音などが身にしみ通る様子）は現代では一般に「しんしん」を用いる、と解説されている。

まず①天沼寧『擬音語・擬態語辞典』だが、現代になって初めて本格的な擬音語・擬態語辞典として編まれた辞書で、解説の中で丁寧に擬音語と擬態語の定義をしている。その中で、「漢語由来のもの」について、日本語オノマトベに「形は似ているが、擬音語・擬態語としないもの」と解説し、辞書に取り上げなかったことが説明されている。

### 1 漢語（字音語）

- 潺々たる水声を聞く
- 堂々と意見を述べる
- 朗々たる声
- 満々と水をたたえている池

などにおける下線を施した部分は、いずれも、物音を、また、状態・様子を表す語であり、その働きからいえば、擬音語・擬態語と同様であるが、このように、漢字書きを本体としていた漢語は、特別のもののほか、擬音語・擬態語としないことにした。（これらの語を、漢語の擬音語・擬態語とか、漢語ではあるが、今は擬音語・擬態語として使われるようになっているものなどと考えることもできようが、ここでは、一応、取り扱わないことにした。）

（解説「擬音語・擬態語について」より抜粋。（pp.21-23）用例は一部省略した。）

表に挙げた漢語系オノマトベは一例も掲載しておらず、漢語由来のものを明確に区別し、日本語のオノマトベとして和語に限定していることがうかがわれる。

②『擬音語・擬態語辞典』には金田一春彦による「擬音語・擬態語概説」があり、①と同様に擬音語・擬態語の定義や特徴をまとめるとともに、「擬音語・擬態語には、もともと固有の日本語、すなわち和語のものと、中国から渡来した漢語のものがある」と断った上で「漢語の擬音語・擬態語」について語形ごとに整理している。「この辞書では、和語のものをもっぱら取り扱う」という但し書きがあり、漢語系オノマトベの存在を認めながらも、①と同じく日本語のオノマトベとしては扱わない姿勢である。しかし、先の表に見るように、「ごうごう」「もうもう」など若干例を和語オノマトベとして取り上げていることから、漢語由来のものに和語と混同しやすいものがあると考えられる。

③『擬音語・擬態語使い方辞典』では漢語をほとんど掲載していない。「ごうごう」があるのは、②の辞典に見るように、和語と捉えられているからであろう。

④『暮らしのことば 擬音語擬態語辞典』には漢語系オノマトベに関わる解説はなく、辞書項目ではごく一部の漢語系オノマトベ以外は取り上げられていない。また、漢語系オノマトベとしては認めていないようではあるが、意味記述の中で「参考」として漢語との関連が記されている。

上記の辞書とは異なり、漢語系オノマトベを積極的に取り上げているのが、⑤飛田良文・浅田秀子編『現代擬音語擬態語用法辞典』である。

### ごーごー [轟々・雷々]

- (1) ① 列車がゴウゴウと音を立てて通り過ぎる。 (②・③は省略：引用者)

- ④ 濁流がごうごうと流れ下っている。  
 (2) ① 大臣の発言はるごうごうたる非難を浴びた。  
 ② その法案はけんけんごうごうの議論を呼んだ。

【解説】(1) (「轟々」と書く) 重く低くて濁った音が連続する様子を表す。(以下略)  
 (2) 激しい議論になる様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。①は「たる」がついて名詞にかかる修飾語になる。②は「喧々囂々」の形で名詞を作る。(以下略)

「ごうごう」は擬音語だが、漢字表記を示して漢語由来であることが明確にわかるようになっている。先の表に見るように、「ごうごう」という語が和語であるという立場もあるようだが、漢語に同音で意味を同じくする「轟々」があることと何らかの関連はあるだろう。すでに和語に組み込まれたと考えることもできようが、⑤は漢語由来として捉え、それを辞書項目に生かしている。

⑤はまた、辞書項目とは別に「参考」扱いで多くの漢語のオノマトペを掲載している。

こんこん (項目の用例・解説は省略：引用者)

【参考】他に「こんこんと」の形で述語にかかる修飾語になる語には、漢語を起源とする次の語がある。

- (1) 「昏々と」非常に深い眠りについている様子。「こんこんと眠る」  
 (2) 「滾々と」清らかな水などが次々にあふれ出る様子。「泉がこんこんと湧き出る」  
 (3) 「懇々と」落ち着いて丁寧に教え諭す様子。「道楽息子にこんこんと説き聞かせる」

「昏々・滾々・懇々」は擬態語に分類されるが、漢字の意味に頼るところが大きく、オノマトペとしての音象徴性が低い語である。漢語として捉えられることが一般的な語であり、他の擬音語・擬態語辞典には掲載されていない。これらの語についても、「参考」としてではあるが辞典に掲載するところに、漢語系のオノマトペを取り上げていこうとする姿勢が感じられる。

以上、辞書での取り上げられかたを見ると、比較的新しい④⑤の辞典でいくつかの漢語系オノマトペが掲載されていることから、従来は辞典類に取り上げられなかったものも、漢語由来という但し書きをしながら日本語のオノマトペに組み入れられていく傾向にあると見てよいのではないだろうか。

### 3. オノマトペの語形

次に、オノマトペの語形の面から、漢語系オノマトペの語形の中で和語系オノマトペと共通する部分があることを見ていく。日本語のオノマトペは、個性的なものも多く創作される一方で、そのほとんどがオノマトペに見られる語形のいずれかに収まっている。日本語のオノマトペとして扱われるものの主な語形を挙げると以下のようなになる。

《日本語のオノマトペの主な語形》

A ッ      A ン      A ー      A A ッ      A ッ A

A ッ A ッ    A ン A ン    A - A -  
 A B        A B ッ    A B ン    A B -    A B リ    A B リ ン    A B リ ッ  
 A - B リ    A B - リ    A ッ B リ    A ッ B ン    A ン B リ    A B A B    A B A B ッ  
 A B B        A B B - ン  
 A B C B    A B ン C B ン    A B リ C B リ

和語系オノマトペと同様に、漢語系オノマトペも語形が定まっている。金田一春彦は、「擬音語・擬態語概説」(『擬音語・擬態語辞典』角川書店)の中で、以下のような分類を挙げている。

《金田一春彦の分類した漢語の擬音語・擬態語》 (例は一部抜粋：引用者)

一 漢字一字のもの 例 燦さん(として)・恬てん(として)

二 漢字二字のもの

- (1)「一焉」の形のもの 例 忽焉こつえん            (2)「一乎」の形のもの 例 断乎  
 (3)「一爾」の形のもの 例 莞爾かんじ            (4)「一若」の形のもの 例 自若  
 (5)「一如」の形のもの 例 突如            (6)「一然」の形のもの 例 愕然  
 (7)同じ語根を重ねたもの 例 營々 快々 煌々  
 (8)同じ子音の拍を重ねたもの 例 恍惚 颯爽  
 (9)同じ韻をもつ拍を重ねたもの 例 安閑 慘愴  
 (10)漢字三字のもの 例 欣々然 洋々乎  
 (11)漢字四字のもの 例 侃々諤々 意気揚々

上記に見る漢語のオノマトペのうち、日本語のオノマトペに近いのは分類の(7)に相当する疊語形式のもので、語形が日本語のオノマトペの典型的なもの(A-A-, A ン A ン, A B A B)と一致している。漢語系であるが日本語のオノマトペに近いと考えられるものは、「ごうごう・もうもう・ゆうゆう・しんしん」など、多くは疊語形式のものである。漢語の疊語形式のものが、日本語のオノマトペとして認められやすいことは、古くは明治期の修辞学及び文学作品からもうかがわれる。明治35年の島村抱月による『新美辞學』では、「譬喩法」の「事物の動作を摸すと思へるもの」の例に「ゆう―と立ち出づる」「ぐさと突き込む」の二例が挙げられている。 「ぐさと」という和語系オノマトペと並列させて「ゆうゆう(悠々)と」という漢語系のものを挙げている点から、「ゆうゆうと」が和語系オノマトペと同様に捉えられていたのではないかと思われる。また、明治15年の宇田川文海による小説「淺尾よし江の履歴」の中に「緩々と呑む」というふりがなが見られる。明治期には漢語に和語のふりがなを当てるというルビの振り方が行われていたが、「緩々」という漢語に対し、「ゆうゆう」は和語であるという意識が働いていたのではないだろうか。「ゆうゆう」という語は、江戸期の戯作にも多く登場し、一般的な漢語であったようである<sup>2)</sup>が、その語形や音の響きなどからオノマトペと同様に捉えられていたことは十分に考えられる。これらの例から、漢語系のものうちいくつかは和語系オノマトペと同様に捉えられていたのではないかと思われる。

疊語形式は、そもそも日本語に多い語形式であるため、疊語形式ではあってもオノマトペではない和語もある。先の辞典①で、天沼寧が「形はにているが、擬音語・擬態語としないもの(4拍の疊語の形式のものについて)として、2項目に以下のような和語を挙げている。

## 2 名詞・副詞・動詞の連用形、形容詞の語幹、その他の品詞の語の一部などを二つ重ねて 畳語にしたもの

- あかあかと輝く夕日      ○ いきいきとした表情  
○ うすうす感づいている      ○ しぶしぶと承知する

(解説「擬音語・擬態語について」より抜粋。(pp.21-23) 用例は一部省略した。)

また、田守育啓・ローレンス＝スコウラップ『オノマトペー形態と意味-』では、「a. 延々 炎々 堂々 営々」「b. 国々 人々 花々 山々」「c. 黒々 白々 赤々 青々」という三通りの畳語を挙げてオノマトペに含まれないことを解説している。これらは「反復形のオノマトペ」と区別される「反復形の一般語彙」であり、連濁を起こす点、様態副詞的に機能する際に「と」を伴う点、語末等に促音をつけて強調形を作ることができない点、アクセント型がオノマトペの「高低低低」とは異なる点、反復が二回以上にはならない点、の五点から、違いがあるという<sup>3)</sup>。

畳語形式の漢語系のオノマトペのうちいくつかは、上の規定に当てはめると日本語のオノマトペとは認めにくいものもある。しかし、「しんしん」「もうもう」「ごうごう」など他のいくつかは、すでに日本語のオノマトペに組み入れられていると考えてよいのではないだろうか。特に、漢語系のものうち、次の特徴を持つものは和語系と同様に日本語のオノマトペとして受け取ってよいのではないだろうか。

### A) 漢字表記の意識が薄れたもの

- B) 動詞との結びつきが強く、言語音と意味内容に有縁性があると感じられるようになったもの

A) の漢字表記の意識が薄れたものとは、例えば「もうもうと煙が立ちこめる」と表現したときに、漢字の「朦々(濛々)」を思い浮かべたり「朦々(濛々)」の字の意味を連想したりしないもの、ということである。漢字の意味に頼らず、言語音自体に音象徴が感じられるようなものである。

B) の動詞の結びつきが強いため有縁性を感じるというのは、例えば「目がらんらんと輝く」の「らんらん」の場合、目を輝かせるときにもっぱら使われ、「らんらん」と言っただけでその様子を思い浮かべることができる、ということである。「わくわく」という和語系オノマトペを聞いたり見たりしただけでその心情が理解できるのと同様に、「らんらん」という漢語系オノマトペを聞いたり見たりしただけでその有様が想像できる、という意味で、A) と同じくオノマトペとしての音象徴性が認められるのではないかと思われる。

## 4. 漢語系オノマトペの影響

次に、漢語系オノマトペが和語系オノマトペに与えた影響を具体的に見て、日本語のオノマトペを考える際に、漢語系オノマトペも視野に入れる必要があることを考えたい。具体例として、「しんしんと」「ほうぜんと」を取り上げた。

#### 4.1 語音の関わり—静寂を表す「しんと」「しんしんと」の場合—

「しんと」という語は現代ではよく使われるオノマトベだが、調査の範囲内では、江戸期以前には用例がほとんど見られなかった。江戸期も用例としては少なく、「しんと」に似た「しんしんと」のほうが多く使われていたことがわかった。「しんしんと」は漢語由来のオノマトベであり、「しんと」という和語の成立に大きく影響していると思われる。

##### 4.1.1 江戸期の「しんと」「しんしんと」

用例は国文学研究資料館HPの古典文学データベース、及び洒落本『花暦八笑人・滑稽和合人・妙竹林話七偏人』（有朋堂文庫）から収集した。（「しんと」1例、「しんしんと」15例）

- (1)夜もしんへと更けわたりました。 (「七偏人」)  
 (2)只森々としづまりて人の影勢も有らざれば (「七偏人」)  
 (3)人絶えてものしんへたる寺町を (「心中宵庚申」)  
 (4)そうするとそれ迄何か高笑をして居ても、しんとなつてコソへ嘶ヨ。 (「八笑人」)

現代語の「しんしんと」は、「静寂である様子」を表す場合には「用法が非常に限定されていて、ふつう雪が降る場合や夜が更ける場合について用いられる」(『現代擬音語擬態語用法辞典』)が、江戸期には例(1)のような「夜が更ける」場合だけでなく、例(2)(3)のようにあたりが静かな様子を表すなど、現代よりも広い用法だったと考えられる。現代語の「しんと」が表す意味も含まれていたのではないかと思われる。

『邦訳日葡辞書』には、以下のように解説されている。

しんしんとして (Xinxinto xite) ただひとりだまって静かにしていること。例, Xinxinto xite iru. (深々として居る) Xinxinto xita tocoro (深々とした所) 静かでもの寂しい所

「しんしんと」は漢語由来の語であるが、「しんと」という和語が一般的に用いられるようになる以前には、静寂を表すオノマトベとして広く用いられていたことがうかがわれる。

##### 4.1.2 明治・大正期の「しんと」「しんしんと」(「しんと」「しいんと」を含む)

用例はCD-ROM版「明治の文豪」「大正の文豪」(新潮社)及び、明治文学全集(筑摩書房)所収の22作品、筑摩現代文学大系(筑摩書房)所収の2作品から収集した。

明治・大正期になると「しんと」の用例は「しんしんと」よりはるかに多く見られる。そのほとんどが「しんと」とひらがな表記されるが、次のような当て字も見られた。

- (4)宛然<sup>まなから</sup>木立がその下へ匿れ込んでいる小径へ人を呼ぶようで、とんと寂寥<sup>しん</sup>として木下闇へ招ぐようで。 (「めぐりあい」)  
 (5)「魔が魅したようだ」と甘谷が呆れて眩く、……と寂然<sup>しん</sup>と成る。寂寞<sup>しん</sup>と成ると、笑ばかりが、「ちゃはははは、う、はは。 (「売色鴨南蛮」)  
 (6)唯土でも掘り起すらしい音が闇寂<sup>しん</sup>とした空気にひびけて伝わってきていた。 (「新生」)  
 (7)遽かに鬱寂<sup>しん</sup>とした家の内の空気は余計に捨吉の心をいらいらさせた。(「桜の実の熟するとき」)

- (8) 暫時、三人は無言になった。天も地も<sup>しん</sup>静として、声が無かった。 (「破戒」)  
 (9) 言ふ聲ハ<sup>しん</sup>沈と響いて聲の絶えるや否や引きつづいて中に<sup>しん</sup>寂寞が耳に打つ計り (「白玉蘭」)  
 (10) 昼間からあまり車の音を聞かない町内は、宵の口から<sup>しん</sup>寂としていた。 (「門」)  
 (11) 内の中は<sup>しん</sup>森としている。 (「戯作三昧」)  
 (12) 四面聲なく、<sup>しん</sup>沈々とした趣むき、 (「小公子」)

「森と」は他の当て字に比べて多くの作家・作品中に使われていた。当て字が多く用いられていた明治期の作品だけでなく、大正期の作品にもいくつか見られた。漢字の当て方は、「寂然と」のように意味の対応する漢語を当てたものが何種類かあるが、用例数が多かったのは「森と」「沈と」「沈々」という音の関連による当て字である。「しんと」は「森々」「深々」「沈々」といった漢語との関連でできた語であり、その意識が使用者の側にもまだ残っているのではないだろうか。

次に「しんしんと」の用例を見てみたい。

- (13) 一面の杉の立樹だ、<sup>しんしん</sup>森々としたものさ。 (「婦系図」)  
 (14) 一本一本の木が<sup>しんしん</sup>犯し難い威厳をあらわして来、しんしんと立ち並び、立ち静まって来るのである。 (「冬の蠅」)  
 (15) 大都市の夜はいま<sup>しんしん</sup>沈々としてふけわたった。 (「多情仏心」)  
 (16) 只しんへとして恐ろしい静かな夜である。 (「開業醫」)  
 (17) 木枯らしのはたと吹き息んで、しんしんと降る雪の夜の如く静かになった。 (「吾輩は猫である」)  
 (18) 夜の温度のしんしんと降下しつつあるのを感じた。 (「土」)

漢語としての「森々」は木々が生き茂る・立ち並ぶ様子や静寂を、「沈々」は夜が更けていく様子や静寂を表すが、明治・大正期には「しんしん」とひらがな表記されて用いられている。「深々」という漢語はもともと静寂を表すが、大修館書店『漢語林』によると、国訓として夜の更ける様子、寒さの身にしみる様子を表すとされる。現在の「しんしん」というオノマトペはこの意味で定着している。いずれの漢語も「静寂」を表す意味を持つことと関連している。

江戸期の例でも見たように、明治・大正期でも「しんと」と同様に「静寂」を表す使われ方をしているものがあつた。「しんと」の例と対応させて例を挙げる。

- (19) 世間は<sup>しんしん</sup>深々として物淋しく悲しさうな小児の泣聲が遠い隣から幽かに聞える。 (「薄命のすゞ子」)  
 (20) 夜に入つてから雨がしよぼへとして降出して、世間も<sup>しん</sup>森として来た。 (「薄命のすゞ子」)  
 (21) <sup>しんしん</sup>森々として陰気な宅であつたのが、 (「雲のゆくへ」)  
 (22) 邸内が<sup>しん</sup>遽に森として来る。 (「雲のゆくへ」)  
 (23) しんしんと底も知らず澄み切った心が唯一つぎりぎり死の方に働いて行つた。 (「或る女」)  
 (24) 君の心は妙にしんと底冷えがしたように刺々しく澄みきって (「生まれ出づる悩み」)



例(19)(20)(21)(22)は辺り一帯や家の中が静まりかえっている様子を、(23)(24)は静かに澄み切った様子を、いずれも「しんしん」「しんと」で同様に表現している。明治19年刊『和英語林集成第三版』には「しんしんと」の項はあるが「しんと」の項はなく、「しんしんとしたところ」という例があることから、明治20年頃まで「しんしんと」が静寂を表す語として広く用いられていたようである。ただ用例数は多くはみつからず、大まかに言えば明治30年代頃から「しんしん」「しんと」の意味領域が明確になったのではないと思われる。和語「しんと」は漢語の「しんしん」という疊語形式の語基を取り出す形で作られたという類推ができるもので、「しん」という音の象徴性を生かしたオノマトベであると思われる。和語と漢語の関連の深さを示す一例である。

#### 4.2 意味の関わり—放心を表す「茫然（呆然）」「ぼんやり」の場合—

「ぼんやり」という語も、「しんと」と同様に現代語では多く使われるオノマトベであるが、江戸期には用例がほとんど見られない。江戸から明治にかけて、「ぼんやり」という語と意味が重なっていた語に漢語の「茫然（呆然）」、和語の「うっとり」「うっかり」がある。ここでは漢語との関連を見るために「茫然（呆然）」「ぼんやり」に焦点を当てて見ていく。

##### 4.2.1 江戸期の「茫然（呆然）」「ぼんやり」

用例は、日本古典文学大系（岩波書店）、新日本古典文学大系（岩波書店）、有朋堂文庫から収集した。22作品中に「茫然（呆然）」が27例あり、「ぼんやり」は0例だった。前田勇編『江戸語の辞典』（講談社学術文庫）に「ぼんやり」の項があり、「五十三次天一坊」（嘉永7年＝1854年）、「曾我絢侍御所染」（元治元年＝1864年）の用例があるので、江戸末期に使用されていた事実はあったようである。

江戸時代（特に後期）は、「放心状態・気抜け」の意味は「うっとり」「うっかり」で表されることが多かった。この二語に近い意味を持つ「茫然（呆然）」という漢語系オノマトベも比較的広く使われていた。

- (1)頭をしたたかに打ちけるにぞいまだ生气つかず、只ばうぜんとは是まで引き摺られ、うつとりとして詞もいはず  
(「八笑人」)
- (2)統清とかうの言葉もなく、しばしが程は茫然と、佇みてあたりしが  
(「修紫田舎源氏」)
- (3)帰らせ給ふ御有様、つれづれとうち見送り、…<中略>…たゞうつかりと佇みけり。  
(「修紫田舎源氏」)
- (4)茫然とあつけにとられて見て居たりしが  
(「七偏人」)

「茫然（呆然）」は、「悠々」「べんべん」などと同様に和文脈にも使われていた漢語系オノマトベであるが、歌舞伎や浄瑠璃の台本にはほとんど見られない<sup>(4)</sup>ことから、文体によって和語系オノマトベ「うっとり」「うっかり」が好まれたのだと思われる。どちらも見られる場合には、「茫然（呆然）」は「うっとり」「うっかり」に対して、あつけにとられて思考が働かない様子、意識が集中できない様子に多く使われ、「うっとり」「うっかり」は他のことに気を取られてぼうっとしている様子、意識が薄らぐ様子に多く使われていた。「茫然（呆然）」の意味領域は広く、意識が虚ろである状態全般を表す語であり、「うっとり」「うっかり」がその一部

分を分け持っていたことになるのだろう。

#### 4.2.2 明治・大正期の「茫然（呆然）」「ぼんやり」

用例は明治文学全集（筑摩書房）、日本文学大系（角川書店）、筑摩現代文学大系、岩波文庫、CD-ROM版「明治の文豪」「大正の文豪」（新潮社）から収集した。

- (5)死骸を見るよりも呆れて暫止茫然と魂ひ脱し如くにて（「高橋阿伝夜叉譚」）  
 (6)頭を押へやうともせず<sup>ぼんやり</sup>ぼんやり呆れて立ちはだかつてゐた。（「罪と罰」）  
 (7)茫然<sup>ぼんやり</sup>気抜けの躰であつたが（「雲のゆくへ」）  
 (8)もう何も思つては居ぬらしく茫然<sup>ぼんやり</sup>して、<sup>うっとり</sup>聽て<sup>うっとり</sup>懽乎気抜けの躰である。（「雲のゆくへ」）  
 (9)暫らくは茫然と気の抜けた様に寤寐の間に低迷してゐたが（「くれの廿八日」）  
 (10)又烟草を呑んでぼんやり考へ込む（「草枕」）  
 (11)老人は…<中略>…右の眼を瞑つて何事かうつとり考へ込んだ。（「黒潮」）  
 (12)其美しさに打たれて…<中略>…茫然と君江を打守りましたので（「乳姉妹」）

用例に見るように、「茫然」「ぼんやり」「うっとり」「うっかり」は江戸期から明治期にかけて「放心している様子」を表す語として意味領域が重なり合っていた。明治期になると「ぼんやり」の使用例は格段に増え、それに伴い「うっとり」「うっかり」が持っていた「放心している様子、気抜けした状態」という意味が減っていく様相が見られた。

明治期に「ぼんやり」が多用されていくのは、明治期のオノマトペ全体の使用状況とも関わっている。明治前期には漢語系のオノマトペに和語系のオノマトペの振り仮名をするなどして、和語系のものを徐々に多く取り入れるようになる。「茫然」「呆然」には時として「ぼんやり」の仮名を振っており、また「ぼんやり」は他に「沈然」「朦朧」「失神」「茫乎」「惘然」という漢語の振り仮名になっている。明治後期には、和語系オノマトペは漢語系のものと対応させずそれだけでも使われるようになり、和語系のオノマトペの使用率が高くなる。「茫然」「ぼんやり」の使用の入れ替わりもこれに当てはまるようである。「茫然」は江戸期と同様に漢語の中でも一般の文章に広く用いられる語であったが、「茫然」は主に「あつけにとられる様子」に使われ、「ぼんやり」は意識が集中せずぼうっとしている様子に使われる、という微妙な使い分けがされていく。一方、「ぼんやり」の使用の増加に伴い、一部分の意味が重なっていた「うっとり」「うっかり」は、別の意味、すなわちそれぞれが現在使われているような意味の比重が高くなっていく。

「ぼんやり」という和語も、「ほうぜん」という漢語音との関わりがあるとも考えることもできる。4.1と4.2で音音と意味の関わりに分けて「しんと」「ぼんやり」の2例を見てきたが、音と意味の関わりは音象徴性を持つというオノマトペの性質上切り離すことはできない。いずれの例であっても、音と意味の両面において漢語の影響が大きいと言えるだろう。

#### お わ り に

従来、漢語系のオノマトペは日本語のオノマトペは異なるものとして捉えられてきたが、和語のオノマトペには漢語の影響が少なからず見られるため、オノマトペ研究の際には、漢語系

オノマトペにも着目することが必要であると考えている。ここで言う漢語系オノマトペとは、和語系オノマトペに対して漢語由来のものを言う。広義には、漢語由来のオノマトペ全てを含める。狭義には、漢語のオノマトペの語形のうち、日本語のオノマトペの語形に重なる疊語形式のものを言う。疊語形式のものについては、「もうもう」「しんしん」などいくつかが擬音語・擬態語辞典にも記載されており、漢語に由来する（日本語の）オノマトペであると認められやすい。しかし、和語系オノマトペに対して漢語系オノマトペ全般が意味などの点で大きな影響を与えていること、また、「ほうぜん（とする）」や「だんこ（戦う）」「さっそう（と歩く）」など他の語形でも、音の響きに象徴性が感じられてオノマトペに近いと思われることから、漢語由来のオノマトペ全般を漢語系オノマトペとして捉え、日本語のオノマトペを研究する際には、その視野に入れるべきであると考えている。和語系と漢語系という2種類のオノマトペが混在していることは、日本語のオノマトペの性質や特徴を考えるとときに押さえておくべき事柄の一つであろう。漢語系オノマトペに着目し、その関連で和語系オノマトペを見ることは、オノマトペの生成や、語音と意味のつながり（＝音象徴性）、動詞や使用文脈との結びつきの強さ、意味の変遷など、オノマトペを幅広く捉えていく際の大きな手がかりになるとと思われる。

### 【注】

- 1) 『国語学大事典』「擬音語・擬態語」の項 (p.214) では「記号とする語音と記号化の対象となる種々の事象（音響を明確に発するものから、何の音響も発しない状態のものまでさまざまであるが）との間に、ある種のつながり即ち音象徴 (sound symbolism) が存在すると考えられる語の一群。」と解説されている。
- 2) 中里 (2000) 参照
- 3) 同書 第2章 音韻・形態的考察 pp.30-31
- 4) 中里 (2000) 参照

### 【参考文献】

- 浅野鶴子 1978 『擬音語・擬態語辞典』角川書店  
 阿刀田稔子・星野和子 1993 『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社  
 天沼寧 1974 『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版  
 芋阪直行 1999 『感性のこぼれを研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか』新曜社  
 筧壽雄・田守育啓 1993 『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房  
 鎌田正・米山寅太郎 1994 『漢語林』大修館書店  
 金田一春彦 1978 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』角川書店  
 呉 川 1990 「鷗外と漱石の小説に見る漢語のオノマトペ」『相模女子大紀要(人文・社会系)』54A  
 田守育啓・ローレンス＝スコウラップ 1999 『オノマトペー形態と意味ー』くろしお出版  
 土井忠夫他編 1980 『邦訳日葡辞書』岩波書店  
 中里理子 2000 「明治前期の和語系・漢語系オノマトペについてー『浮雲』を中心にー」『上越教育大学研究紀要』19巻2号

- 2001 「明治後期の和語系・漢語系オノマトベ」『上越教育大学研究紀要』20巻2号
- 2003 「オノマトベの語義変化－明治期の「うっとり」「うっかり」を中心に－」『文学・語学』176号
- 2005 「静寂・沈黙を表すオノマトベ－和語系・漢語系オノマトベの関わりから－」  
『上越教育大学紀要』24巻2号
- 飛田良文・浅田秀子編 2002 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 福田泉 1994 「オノマトベの研究」『東京女子大学言語文化研究』3号
- 前田勇編 1979 『江戸語の辞典』講談社学術文庫
- 松村明編 1974 J.C.ヘボン『和英語林集成 第三版』復刻版 講談社
- 山口仲美編2003 『暮らしのことば 擬音語擬態語辞典』講談社

# The Influence of a Word of Chinese Origin to See in the Onomatopoeia

—The Relations of the Onomatopoeia of Japanese Origin and the Onomatopoeia of Chinese origin—

Michiko NAKAZATO \*

## ABSTRACT

It thought around the onomatopoeia of Japanese origin so far by the Japanese onomatopoeia research. Though it is recognized, the onomatopoeia of Chinese origin has hardly been featured in the onomatopoeia, mimesis dictionary as well. But, what has been taken as the onomatopoeia of Japanese origin by a word since the old days is in the geminate word even in the onomatopoeia of Chinese origin, too, and it can think that it has deep relations with the onomatopoeia of Japanese origin.

As for the onomatopoeia of Chinese origin, both a word form side and the aspect of the meaning give the onomatopoeia of Japanese origin a great influence for example to see it for relations between "*Shinto*" and "*Shinshinto*" and between "*Bonnyari*" and "*Bouzen*".

It pays attention to the onomatopoeia of Chinese origin, and thinks that to see the onomatopoeia of Japanese origin in that relation is that the formation of the onomatopoeia and a sound symbol, the verb, the strength of the connection with the use context and the change in the meaning become the big clues when onomatopoeia is taken widely.

---

\* Division of Language Department of Japanese Language